

学校名	さいたま市立大宮国際中等教育学校	執筆者名	風間 貴大
研究タイトル	生徒の学びは校内で完結しない ～外部連携のシステム化と安全性を考える～		

① 育てるべき資質や能力・・・自分で設定した未来を担う子どもたちを育てるべき資質や能力について、その必要性を踏まえて記述する。（1 ページ程度）

主に育成すべき資質/能力のキーワード	コミュニケーションスキル、生きる力（リーダーシップ、思考力・創造力・表現力、情報活用能力等）、「自分事」として考える力
--------------------	-------------------------------------------------------------

未来を担う子どもたちには、学びを自分たちの世界で完結せずに、それを社会にどう生かしていくことができるか、自分のもっているスキルや能力をどのように発揮していくことができるかということが求められている。俗に言う「勉強ができる子」よりも、コミュニケーション能力にすぐれておりリーダーシップを発揮しながら組織を動かすことができる人や、思考力・創造力・表現力が豊かで人の心を動かすことができるような人、情報活用能力にすぐれており AI など活用しながら効率的に作業をこなすことができる人など、「生きる力を兼ね備えた子」がこれからの世界では必要とされてきている。

生徒たちの多くは学校というコミュニティが自分たちの世界であり、その外の世界や社会が実際にどうなっているのかということを感じることがあまりない。例えば授業で過疎化問題についてとりあげても、それはデータ上の話やどこか他の世界の話であるように感じている生徒がほとんどであろう。また修学旅行などでその環境を目の当たりにしても、それらを“自分事”として捉え、何かアクションにつなげるということは滅多にないことである。さらに言えば、世界で起きている「貧困」や「戦争」なども、日本で生活している以上、我々大人でさえ“自分事”として行動できる人は早々いない。

ではそれらを生徒たちが“自分事”として体感し、自分がこれからの社会とどのように関わり、どのように行動を起こしていけばいいかを考えるようになるためにはどうすればよいか。それは、生徒が学校を出て、外部の人たちと関わり合い、共に社会をつくっていくことに貢献していくことである。

生徒たちが課題意識をもって社会に出て学びを深めていくためには下記のような準備が必要である。

1. 生徒一人ひとりが自分の興味・関心から課題を設定し、探究欲をもって行動するようにする。
2. 外部との連携方法や、手段が明確かつ安全に取り組むことができるようにする。
3. 学びを自分の中で完結せずに、学校内外で表現できるようにする。

現在本校では、総合的な学習（探究）の時間や各教科の探究型の授業の中で、生徒が外部の人と連携を図りながら探究活動に取り組むことができている生徒も多くいる反面、学校として外部連携システムが曖昧であるため、外部との連携に1歩を踏み出せずにいる生徒や、踏み出したが滞ってしまっている生徒、どこかで外部に迷惑をかけてしまっている生徒などが出てきている。加えて先生方もその指導方法にムラが生じてしまうことや、やり方に迷われている人もいる。さらに外部団体の安全性の確認などにも課題があり、体制が万全に整っているわけではない。

本教育計画は、改めて本校で取り組んでいる活動の体制を整え、生徒が社会で学びを深めることが円滑にできるようにし、生徒一人ひとりが生きた学びをすることができるようにするためのものである。

② 子どもたちの現状・・・子どもたちの置かれている環境や状況、学習レベルなどを客観的に把握し、収集した確かな情報に基づき、子どもたちの現状について記述する。（1～2 ページ程度）

本校は開校 7 年目の市立の中等教育学校かつ、国際バカロレア（International Baccalaureate／以下 IB と呼ぶ）の教育プログラムを取り入れた IB 認定校である。本校に通っている生徒たちは小学 6 年次に適性検査を受検し、例年 4 倍程度の厳しい選抜を突破した子どもたちである。そのため基本的な学習能力は高く、選抜方法の特性から、資料や情報の活用能力や文章での表現力が高い生徒が多い。

本校は中等教育学校であるため、6 年間を見通したカリキュラムを展開している。その中でも特徴的なのが、本校の校訓である「Grit（やり抜く力）」「Growth（成長し続ける力）」「Global（世界に視野を広げる力）」の 3 つの G を表す『3G Project』という授業である。これは一般でいう総合的な学習（探究）の時間であり、この探究的な授業を開校当初から学習のコアとして行っている。また IB 教育では、中等 4 年次に Personal Project（以下 PP と呼ぶ）を行うことがカリキュラムに含まれている。PP では個人で社会課題について探究し、自分で考えた様々な実践に取り組む。それを最終的に 15 枚以内のレポート論文としてまとめる。そのため本校でもこの PP を軸にしながら 3G Project の計画が立てられており、中等 1 年次から一人ひとりが自分たちで課題を設定して探究に取り組んでいる。

中等 1 年次では本校の授業や行事などについて先生や先輩などからインタビュー調査などを行い、ポスターにまとめ、最後は来校者に向けて発表を行う。中等 2 年次では SDGs をテーマに課題を設定し、個人で探究活動を行う。中等 3 年次では Glocal（「グローバル（Global）」と「ローカル（Local）」を組み合わせた言葉）をテーマに Project をすすめていく。そして中等 3 年次の後半から中等 4 年次で PP に取り組み、その後中等 5 年次や中等 6 年次でも PP で各々が設定した課題に向けて探究し続けていく。またその探究の成果は、10 月に行われる探究発表会という学校行事で全校生徒が発表を行う。この行事は保護者だけでなく、学校関係者や入学希望者なども参観可能であり、年々来場者も増えている。



図 1 発表の様子



図 3 代表生徒によるホールでの発表



図 2 体育館での発表



図 4 受付は希望をした生徒が対応

その成果として、毎年実施している校内アンケートにおいて、2024 年度末では下記のようなデータが出ている。（中等 1 年～中等 6 年の全校生徒対象／回答数 600）

質問内容	肯定的な回答
あなたは、探究学習において知識を実社会と関連させて捉えようとしたか。	90.60%
あなたは、自分の人生や実社会をよりよくするために能動的に学ぶことができましたか。	88.59%
あなたは、所属する様々なコミュニティに、その一員として積極的に参加、活動することができましたか。	86.58%
あなたは、他者の考えや文化などの違いを受け入れ、尊重しようとしたか。	96.14%
あなたは、課外活動（放課後、学校発信のコンクール等の校外活動）に積極的に取り組むことができていますか。	69.63%

そして昨年度迎えた第 1 期生の大学入試では、3G Project での学びを生かして総合型選抜などの年内入試を積極的に取り組み、1 学年 145 名ながら延べ 78 件（国公立 20 件、私立 58 件）の年内入試での合格を得ることができた。

このような結果が本校で出ているからこそ、今後さらなる探究活動の発展が望まれ、その多様化や複雑化が想像できる。しかし、そもそも開校年度からすべてが完璧に計画されていたわけではなく、コロナ禍という世界的な自粛期間と毎年目まぐるしく変わっていく社会情勢もあった上で、生徒の学びを止めないために半ば強引に押し広げてきたところも多い。そのため、学校としてある程度のシステムができてはいるものの、基準が曖昧である部分や確認が不十分である中での活動などが増えてきている。また外部と連携を始める人の増加とその年齢の早期化という課題も出てきている。教職員も本校での経験の差や一人ひとりの思う教師像に差があることはやむを得ないことであるという状況に加え、公立学校であるが故に教職員の入れ替わりも今後増えていくことが見込まれている。

生徒の学びが校内で完結しないような雰囲気づくりは段々できつつあるものの、このようにそのシステムが万全には整っていない。そこで生徒たちが探究意欲を高めながら、外部との連携がスムーズかつ安全に行われるようなシステム作りを計画していく。

③ 教育支援の方針・・・子どもたちの現在の状況を踏まえ、過去の実践経験や知見（失敗）なども加えて、教育支援の方針を記述する。（2～3 ページ程度）

方針 1. 生徒が外部連携を実施する際の教員のフローを明確にする

教員が生徒の活動を認めながら、生徒が自主的に行動に移すことができるようにするために、本校には「Student Agency Manual」（図 5）が開校当初から制定されている。これを元に生徒 Agency を活性化させながら教育活動に取り組むことができています。自分は開校 2 年目に本校に赴任し、開校 4 年目からこの Manual の改善に取り組んでいる。私は既存の Agency の申請項目の中に、外部連携を行う項目や校外活動を行う項目を整えてきた。その甲斐あって連携が活発になり外部からの評価も得られてきた一方で、取り組みを行う中での外部連携のトラブルや連携先に本校の取り組みが正しく伝わらないことも出てきた。さらに生徒も教員も、Agency の申請用紙を正しく理解せずに書いているような状況もしばし

ば見受けられている。そこで改めて教員のフローを明確にし、教員が良きアドバイザーとして生徒を正しく導けるシステムづくりが必要であると考えた。

MOIS Student Agency Manual	1
1 下記の事項とは異なる、新しい Student Agency の分野の作成 Request Code 【Agency Request】	5
2 生徒による校内広報活動 Request Code 【Promotion】	6
3 生徒によるアンケート調査 Request Code 【Survey】	8
4 生徒による外部連携依頼 Request Code 【Connection】	9
5 校外活動 Request Code 【Fieldwork】	10
6 ASA サークル Request Code 【Circle】	11
7 生徒によるワークショップ・イベントの立ち上げ【Workshop】	13
8 生徒が作成した動画の MOIS YouTube チャンネルでの公開【YouTube】	14
9 校外への奉仕活動の企画【Volunteer】	15

図5 Student Agency Manual の目次 ※「MOIS」は本校の略称

方針2. 生徒が校外と関わる際の保護者の役割を明確にする

生徒が学びを深めていくことは保護者としても願ったり叶ったりであると思うが、対応をすべて学校で行うことには限界がある。特に生徒の引率や外部連携の最終決定に関しては、学校として負いきれないところがある。例えば複数の生徒から同時に引率を頼まれても身ひとつでは対応はできない。また連携先から引率の要望があったとしても、交通費等の勤務上の手当の問題もある。学校は生徒の探究活動をサポートしたり提案をしたりすることはできるが、生徒自身の考えた探究活動であるためには取り組みの最終決定は生徒本人がする必要があり、その決定の責任は保護者が担う必要がある。家庭によっては「学校が関わっていることはすべて学校がやってくれる」という認識である家庭も一定数いることがあるので、しっかりと保護者への情報開示と協力体制の構築が必要である。

方針3. 生徒が外部団体を校内に呼び込む際の手順を明確にする

生徒が自らの判断の下、外部団体を見つけて連携を行っていくことは、学校側の負担は少ない。ただしその団体が公教育の場である学校に招聘する場合は慎重になる必要がある。例えば政治的な内容や宗教的な内容、表向きはそうでなくても反社会的勢力が関わっているような団体、営利目的での学校の利用などが問題にあがる。現在すでに多くの団体が生徒発信で本校に来校しワークショップなどを開いている。その団体は公に認められている団体（大宮アルディージャなどの社会的地位が確立されているところや行政で認められている NPO 団体など）以外も来ることがある。事件や事故に巻き込まれたり、学校を布教活動や促進販売の場として使われたりしないようにする体制づくりや事前確認が必要である。

方針4. 教員が生徒の知見を広げるための取り組みの支援とその範囲を明確にする

本校では教員の個性を生かして、教員が自ら様々なワークショップを開催し、生徒の知見を広げるアプローチをしていくことを推奨している。ワークショップは校内で行うものが多いが、活動に積極的な先生は、興味のある生徒たちを募集して、現地でしか行うことができない学習体験を実践する場合がある。例えば美術館巡りや史跡巡り、地質調査などがあげられる。しかし公教育であるからこそ、その勤務体制にも限界がある。それでも生徒の探究活動を校外に広げていくためには教員に対する支援の体制づくりも必要となってくる。

方針 5. 生徒の取り組みをデータベース化する

すでに数多くの生徒の輝かしい例が存在しているが、それらは何かきっかけがあった際にその都度明るみに出ているという状況である。例えばコンテストで入賞したり、何かの記事で取り上げられたり、先に述べた学校行事の探究発表会で代表になったときなどである。ものによっては目立たないが地道に連携をして探究を深めているようなことや、同じ連携先で探究を扱えると相乗的に深まるようなこともあると感じている。また探究に迷った際もデータベースが存在していれば、そこから外部連携を始めることができる場合もあるだろう。さらに本校の取り組みを広く社会に発信し、より多くに賛同を得るためのエビデンスとしても活用できると思われる。個人情報の扱いの難しさや慎重にならなくてはならない面は多いが、完成すれば大いに効果的なものになることは間違いない。

方針 6. 校外の様々なコンテストやコンクール等の情報を発信する

現在、大学や企業が主催している様々なコンテストやコンクールが存在している。生徒たちの学びはそういったコンテスト等にチャレンジしていくことで、学びが精錬されていく。コンテストによってはフィードバックをいただけるようなものも多く存在すると共に、その後の進路に関わるようなものもある。6年間という学びの利点を生かして、生徒たちがより積極的に校外の様々なコンテストに参加していくような体制づくりは、生徒にも学校にも、そして社会にも貢献していくことができると考える。

方針 7. 全教職員が 1 人ひとりの個性を輝かせながらも学校として一枚岩になった体制を整える

最後に、改めて全教職員が一枚岩になった体制で、先生方一人ひとりの個性が生きた探究活動ができるように整えていく必要がある。現在校内でも職員研修の時間を確保しているが、開校当初に比べて校内で行うことの多様化と教職員の人数の増加に伴い上手く機能していないところが課題となっている。学校としてしっかりと指導の方針を定め、指導が迷わないような組織づくりを目指していく。

④ 実行計画と準備状況・・・「③教育支援の方針」をもとに、自分が「いつ、何を、どのように行うのか」を具体的な実践や行動に落とし込み、来年度以降の実行計画と準備状況を明確に記述する。（3～4 ページ程度）

具体的な工夫のキーワード

手順の明確化と職員研修、生徒・保護者理解、情報の公開と活用、組織づくり

教育支援の方針に基づき、本校の IB 研究部長として以下のような計画で動き出している。

方針 1. 生徒が外部連携を実施する際の教員のフローを明確にする について

「外部連携」といっても、その連携先は多岐に渡る。そして学校としての対応は連携先の要望によって変わってくる。そこでまずは、先に述べた Student Agency を生徒が提出した際、確認を行う担当部署の教員（管理職を含む）を明確にする。そうすることで申請を円滑に進めるだけでなく、しっかりと内容を確認しながら適切な確認やアドバイスができるようにした。次に外部連携の入口について考えると、お客様お問い合わせフォームのような常にオープンで意見等を募集しているところがある場合と、部署の問い合わせ先だけがある場合があることがわかる。前者の場合は文字通り生徒からの問い合わせは容易であるが、後者の場合はしっかりとした段取りと相手の理解が必要である。そのため、連携先が企業や NPO 団体などの場合と学校関係や行政関係の場合と分けながら対応を調整した。

本校における外部連携の基本の形とそのフローを 2025 年の 4 月から管理職と確認し合い、同年 6 月からフローを職員会議で提示した。しかしこれで終わりではなく、今後大事なのは校内での指導の徹底と世間の理解である。フローを示してもイメージできない先生や、イレギュラーな対応を強いられる場

合も存在する。そのため今後の教員研修の充実を計画している。（職員研修については、詳しくは方針 7 の内容で触れる。）また世間の理解を得ていくために、本校の取り組みの説明や連携依頼があった際の積極的な受け入れをお願いする文書を作成し、校長名で市内の公共施設に配布する。あわせて本校の HP に載せることで外部からの問い合わせがあった際に閲覧できるようにする。その際は方針 5 のデータベースの内容などを含めながら、過去の実践例を示していく。これらの取り組みを整理しつつ、早めに公開できるものは公開しながら来年度 4 月の年度初めのタイミングで一斉に配信をする予定である。

方針 2. 生徒が校外と関わる際の保護者の役割を明確にする について

現在、すでに今年度に入って 2 件の保護者通知を行っている。1 件目は保険についての内容である。外部連携の場合、現地に行って活動することが多く発生し、生徒たちだけで活動することが多い。その場合は学校の取り組みの一環とはいえ、学校は活動を推奨しているだけで、教員がそこで授業を行ったり引率や指導をしたりするわけではないため、学校の保険では賄えないケースがほとんどである。そのため保護者には任意で保険に加入を入れていただく必要があるという旨を毎年通達している。2 件目は生徒の自主的な校外活動に関わるご理解とご協力についてである。内容は以下の通りである。

～略～

学校では生徒の学びの機会を広げるため外部団体について様々な情報を生徒に提供できるよう努めておりますが、活動への参加申し込み、活動内容への問い合わせ等、外部団体との連絡は学校からの紹介の有無にかかわらず、原則として、それぞれの団体と生徒（ご家庭）とのやりとりとなります。

つきましては、生徒の自主的な校外活動における情報の確認や各団体との連絡に関しては、ご家庭でも十分ご留意いただき、お子様とご家庭で事前によくご確認いただいた上で活動を進めてくださいますようご協力をお願いいたします。何かご不明な点や不安な点等がございましたら、遠慮なく担当までご連絡ください。

～略～

今後は本件についての継続的な保護者への連絡と入学者説明会等で、入学する前から理解と協力をさせていただけるようにする。現在は内容を具体的な例を含めながらスライドにまとめて、視覚的にもわかりやすい資料の作成と、それを HP に掲載する計画をしている。

あわせて、生徒の外部連携におけるそれぞれの役割を下記のようにまとめた。

アドバイザー：生徒の活動のサポート <ul style="list-style-type: none"> ・探究活動のサポート ・外部連携先との調整、生徒が外部連携するためのサポート 	IB 研究部（学習部）：連携先の集約 <ul style="list-style-type: none"> ・外部連携先の業種の確認 ・外部連携先の集約 ・アドバイザーの研修指導
管理職：外部連携の相談 <ul style="list-style-type: none"> ・外部連携の相談対応 ・外部連携先の適宜確認 ・連携トラブルの際の対応 	保護者：外部連携の最終判断 <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの外部連携先の把握 ・外部連携の最終的な判断

今後はこのすみ分けの内容を年度内に示し、それぞれの立場での適切な生徒のサポートに取り組む。

方針 3. 生徒が外部団体を校内に呼び込む際の手順を明確にする について

この内容については 8 月現在、管理職を交えながら検討をしているところである。現段階での案としては下記のようなことを計画している。

1. まずは確実に管理職に報告を行う
2. 外部団体向けの確認書を作成、提出をしてもらう
3. 確認書を学校で保管する

確認書には「反社会的勢力に関わっていないこと」「特定の政党を支持するようなことは行わないこと」「宗教活動は行わないこと」「営利目的で行わないこと」などについての誓約をしてもらう予定である。すでに生徒が校内に呼び込んで活動している外部団体も多いため、対応については早急に決める必要がある。また表向きは問題ない団体がすべてであるため確認書の法的な力について調査中である。こちらも年度内の完成を目指し、新年度からは徹底できるように計画をしている。

方針 4. 教員が生徒の知見を広げるための取り組みの支援とその範囲を明確にする について

本校には部活動と同等な Club Activity（以下 CA）と同好会と同等な Circle 活動が行われている。これらのグランドデザインを整えながら、生徒ではなく教員が主体となって立ち上げる Circle 活動を許可する体制づくりを計画している。現在の活動は、先生方が各々突発的に行うことが多く、その管理がままになっていない状況である。まずはそれらを集約するためにもしっかりとカテゴライズを行う。その上で、手当の内容については管理職と相談をしていく。校長の職務命令があった上でどこかへ行くわけではなく、先生個人の発案で外部に出ることになるので基本的には手当の支払いは難しい。とはいえこのような探究学習を推奨していくために、探究活動の部活動化なども考慮にいれながら体制を整えているところである。加えて全国大会や世界大会レベルの対応についてもしっかりと方針を定める。生徒の大会出場や受賞は大変喜ばしい反面、交通費や宿泊費等の対応で頭を抱える状況も出てきている。こちらも年度内には先生方からの意見も集めつつ環境を整え、来年度に試験実施を行い、その上で最適な形を見つけていく計画である。

方針 5. 生徒の取り組みをデータベース化する について

本校は全校生徒が授業内外で様々な活動に取り組んでいる。理想はその全てをデータベース化して、どのような探究活動や外部連携を行い、どのような実績を残したのかをすぐにアクセスできるようにすることである。とはいえ、生徒が学校外で行っているものに対してまですべて管理をすることは難しく煩雑になってしまう。そこで、方針 6 の情報発信と併せて検討していくが、ここでは校内で全校生徒が確実にに行っている 3G Project に限定してデータベース化をすることを計画している。そこには一人ひとりの「研究テーマ」「外部の連携先の有無と詳細」「成果物（レポートやポスターなど）」が一目でわかるようにしたり、アクセスすることで詳細が見えたりするようにする。まずは必要最小限のデータを集めたデータベースを今年度中に作成する。来年度以降は、項目の調整以外に、データベースの生徒の探究学習への活用方法、生徒への公開や外部への公開なども計画している。しかしながら個人情報に関わることも多く含まれることや、レポートの盗作などといった被害や違反行為につながる可能性も大いにある。各部署や生徒たちとも慎重に検討をしながらアップデートをしていき、来年度以降少しずつよりよい形にしていく予定である。

方針 6. 校外の様々なコンテストやコンクール等の情報を発信する について

すでに校内のコンテンツ（授業の中や、校内の掲示板、電子連絡ツール等）を活用しながら定期的に情報を発信している。その甲斐もあり、年々生徒たちの受賞実績も増えているように感じている。



図 6 Mathematics A-lympiad 世界 3 位



図 7 第 16 回 IIBC
高校生英語エッセイコンテスト
個人部門 最優秀賞

他にも、子ども食堂のボランティアのプロジェクトを立ち上げ、SDGs の課題にも取り組みながら実践している生徒のグループ（持続可能な子ども食堂の運営～4K 子ども食堂～）が高校生ボランティアアワード 2025 全国大会に出場したり、大学生による中高生のための SDGs/サステナビリティアワードで優秀賞を受賞したりしている。

しかし一般の生徒に聞くと、コンテストの存在を知らない生徒や、「自分なんかは受賞されるような大きなことは取り組んでいない」と消極的な生徒が多い。無論、受賞されるに越したことはないが私が大事にしたいのは“社会にアクションをしていくこと”である。だからこそ、コンテストに参加することに意味があり、その経験が生徒の成長につながっていく。とはいえ、本校の取り組みであればほぼ全員が何かしらのコンテストの受賞候補となり得るとも確信しているので、一層外部へのコンテストの促進を考えている。そのためにまずは情報発信の手順の改善を行う。より生徒がチャレンジしやすくなるために、視覚的にもわかりやすく情報を簡潔に一覧にまとめて、定期的にポスター等を作成していく。あわせて受賞者のデータ化と受賞者の校内掲示を発展させて、校内外に宣伝できる環境を整えていく。

学校の授業との両立も考慮し、生徒が外部で活動をする際は、基本的には公欠になるような体制づくりとその申請の手順の明確化も現在行っている。

方針 7. 全教職員が 1 人ひとりの個性を輝かせながらも学校として一枚岩になった体制を整える について

最後に一番大事なのが教職員への指導である。このような取り組みは一般的ではなく、ベテランの教員であっても対応がうまくいくとは限らない。さらに本校は若手の教員も多く、生徒に良かれと思って実践した行動が、事前に確認すべきフローに抜けがあったり業務の偏りや対応の差につながったりすることもある。また外部との連携においては、世間一般の大人としてのマナーとしての対応と、どこまで生徒に任せればよいかというラインも曖昧である。

細かく決めずに多角的な価値観や視点で生徒の指導に携わることもひとつの手ではあるが、ずらしてはいけない教員のマインドセットは確実である必要がある。改めて本校の目指す教師像と照らし合わせながら、計画的な職員研修の場と研修後の教育指導に生きる内容をつくっていく。まだまだ計画段階で内容はほぼ白紙であるが、ここまで述べた方針の内容を軸に構成し、来年度 4 月から一斉に動き出せるように本校 IB 研究部の分掌チームで内容を詰めているところである。

＜終わりに＞

今までの本校での様々な教育実践のおかげで、外部に出て何かに取り組もうという意志をもつ生徒はとても多い。このような学校づくりに携わってきた本校の教職員すべてに感謝をしている。

より生徒の外部へのアプローチを積極するために、今年度は学校で生徒の名刺を作成することになっている。私はこの生徒名刺の利用のために、生徒の名刺の活動ポリシーを作成した。

この文書は生徒名刺に印刷された QR コードから、HP に掲載された活動ポリシーにアクセスできるようになっている。このように、生徒が自分たちの手で、足で、目で、外部と関わっていくことができる体制づくりも行っている。今後は保護者への通知と連携体制の構築、生徒への使い方の指導と個人情報取り扱いの注意喚起、印刷の手順のシステム化（現在は生徒から教員に申告し、教員が印刷することになっている）といった準備を行っている。

生徒名刺の活動ポリシー
 さいたま市立大宮国際中等教育学校
 IB 研究部

この度は本校生徒の活動にご協力くださりありがとうございます。

本校では様々な活動において、生徒が自身の興味・関心に応じ、探究的な学習に取り組んでおります。生徒たちは本校の校訓である「Grit mindset～やり抜く力～」 「Growth mindset～成長し続ける力～」 「Global mindset～世界に視野を広げる力～」の3つのGを育みながら、ものごとを自分事としてとらえて責任ある行動を起こし、よりよい世界を築くことに貢献するために、学校生活のあらゆる機会を通して、未来の学力を備える活動を行っています。

＜活動ポリシー＞

- 生徒は積極的に外部の方々と連携し、心を開く人を目指します。
- 生徒はコミュニティーを理解し、思いやりのある人を目指します。
- 生徒は自身の探究をより深めるために、挑戦する人を目指します。
- 生徒はよりよい活動をつくるために、コミュニケーションができる人を目指します。
- 生徒は自身の行動とそれに伴う結果に責任をもつために、信念をもつ人を目指します。

図8 生徒名刺の活動ポリシー

これらの本校の取り組みは、上手く実践していくことができれば全国の探究学習のスタンダードとしても活用できると思われる。またこのような取り組みが社会に知られれば知られるほど、企業や団体からのアプローチも増えていくであろうと考える。ただし同時にその安全性を強く問われる場面も増えてくるであろう。だからこそ慎重になりながらトライ＆エラーを繰り返し、安全性と有効性を考えていく必要が生徒にも教員にもある。

学習環境がしっかりと整えられることで生徒の学びは充実していく。それは教科の教材研究と同じで、生徒の探究心をくすぐるような準備ができれば、生徒は自ら探究を始める。あとはどこまでその世界を広げられるかが、これからの教育で大事なことである。生徒の学びを校内で完結させずに、一人ひとりが校内でチャレンジを行い、全員が在学中に何かしらで外部とつながりをもつことが今の私の目標である。そのためにも、誰にとってもわかりやすく、安全性も加味された組織づくりをこれからも心がけて計画・実践していく。